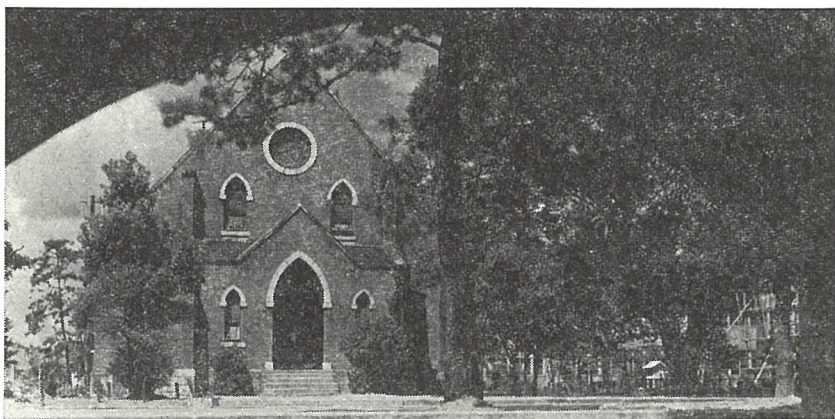


校友・同窓が語る

同志社 100 周年への展望 (3)

——九州編——

(1971. 7.28)



出席者 (順不同)

- | | |
|---------------------------|----------------------------------|
| 上田 洸 (筑紫産工株式会社
取締役、校友) | 高木 勲 (校友会北九州支部長
公認会計士・税理士、校友) |
| 古沢 基生 (西南学院大学教授、校友) | 福田 利彦 (貴船商事社長、校友) |
| 岡部 治子 (同窓会福岡支部長代理) | 久永 碧 (同窓会北九州支部長) |
| 熊谷 勲 (福岡女学院教諭、校友) | 吉田 法晴 (校友会理事) |

司会

大江 直吉 (同志社本部庶務部長)

司会 それでは、ただいまから座談会を始めさせていただきます。実は、今回は、同志社が四年後に百周年を迎えますので、九州地区の校友同窓の方にお集まりいただきまして百周年に向かっての展望についていろいろご意見を伺って、「同志社時報」の誌上を飾らせていただきたいと思います。参りましたので、よろしくお願いしたいと思います。

ちょうど東京地区でもやりましたし、また京阪神地区でもやりました、さらに、このたびは九州の地区でやらしていただくことになりました。百周年に向かってのご希望なり、また、ご意見なり、あるいは同志社の教育等について、いろいろなご批判を、ざっくりばらんに打ち解けてお話を願えば、非常にけっこうだと思っております。

最初に北九州地区の高木支部長さんからひとつ何か同志社についての印象であるとか、あるいは教育の問題であるとか、あるいは同志社の現状についてご意見を伺わしていただければ、幸いです。

同志社精神の強調を

高木 教育問題というテーマが入っておりますが、ちょっと私お伺いしたいのは、キリスト教主義ということ、同志社精神といいますが、というものは分けて考えるべきなのかということ、まあ、同志社精神そのものにはキリスト教主義の気持ちが多分に入っておりますので考えていいわけなんでしょうね。

司会 そうでございます。同志社の憲法ともいいます同志社の寄付行為の一番中心は、「同志社はキリスト教を徳育の基本とする学校を経営する」とうたつてあるわけです。だから、キリスト教主義というのと同志社精神といいますが、同志社の教育とは、一致しておるように考えていただいたらけっこうだと思います。

高木 私、これは特に同志社主義ということとは強調していただきたいんですが、最近の学生あたりの、感覚として、それから、最近校友会の支部長会議で皆さん方のお話を伺ってまでも、どうやらこのごろの学生には、私たちが思う、いわゆる同志社主義というものの意識が欠けているんじゃないかというふうな感じがいたします。ぜひこれは強調してやっていたきたい。と申しますのは、私ク

リスチャンじゃございませんが、やはり、わずか三年でございましたが、お教えいただきました、その後人生の中において、自分の心をささえていたのは、やはり、いわゆるキリスト教精神といえますか、そういうものを含めた同志社精神だろうと思うんです。何かとたんに行き詰まったとかいうようなときに心のささえといいますかね、そういったものをあたえてくれたのは確かにこのキリスト教精神だったと思うんです。こういった、精神的な面は、学問とは別にやはり強調されて身につけておいたほうが、将来の役に立つと考えます。

司会 おっしゃるとおり、同志社はキリスト教主義という立場で、学生諸君のために礼拝をやったり、あるいはまた、キリスト教の講座を持ったりしてやってくるわけなんですが、学生が大学だけで約二万人近くもおりまして、したがって、浸透してないという恨みがあります。いつもそういうご批判を承っておるわけなんです、その点については学校側も十分反省をして、同志社の、いわゆる基本的な設立の趣旨であるキリスト教主義といえますか、あるいはそのキリスト教を、新島先生が

受け継がれたその精神というものを、学生諸君に十分に理解させ、また、くみ取っていただく、そういうふうなことは一生懸命やっているわけなんです、非常に不十分な点もございまして、高木支部長のおっしゃったとおりだと思います。今後できるだけそういう問題は努力をして、ご希望に沿うような形にさせていただきたい、と思っておるわけです。

そういう問題で、古沢先生にひとつ、同志社をご卒業になって西南学院にいらっしゃるわけですから、いろいろと学生の問題とかあるいはキリスト教教育の問題というようなものについても、お考えをお話し願ったらけっこうだと思います。

古沢 もうすでに二回ほど座談会があつて



古沢 基生氏

りっぱな校友の方々がりっぱな意見を出しておられるので、私もがいまさらつけ加えることはないように思うんであります。げんにその座談会の記事を見ましても、たいへんけっこうなことが述べられております。

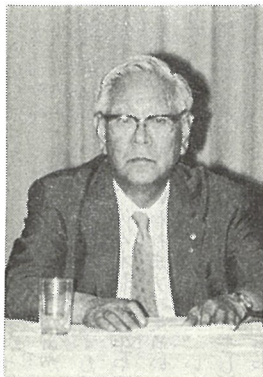
私、卒直に申しまして、今も大江先生がおっしゃったように、学生が約二万人もおると。これはほんとにマスプロであつて、人数が多過ぎる。いまさらどうにもできないのかもしれないけれども、少なくともこれ以上学生をふやさないことが望ましいと思うんです。大江先生、財政状態はどうなんでございますか、二万人の学生があつて。

司会 卒直に申し上げますと、同志社大学は授業料値上げをいたしましたから、その後六年間値上げをしておらないわけなんです。



吉田 法晴氏

したがって、物価も大巾に値上りをしておりますし、それから、先生方にお支払いする、いわゆる給料といいますが、そういう経費も大体倍近くになってきておりまして、したがって一生懸命合理化をして、あるいは経費の節約をしていままでもやってきたわけであります。が学費の問題を考えないと困る状態です。いわゆる経常の勘定でも赤字が相当累積して来るのではないかと思います。これは同志社だけの問題じゃなくして、全日本の私学が直面している問題でございまして、日本の私学が一致結束したらどうだということもいわれております。それからまた、もう一つは、いままかんにいわれております国からの私学に対する助成ですね、これもだいたいぶん進展をしているわけですが、現在の助成程度で



高木 勲氏

はとうてい同志社の財政をささえることは期待ができませんので、何とかしてこのピンチを切り抜けるようなことを、学校当局自体としても考え、また努力をしなくちゃならない状況です。

古沢 さっき申し上げましたのは、同志社教育、精神教育ということは人数が多くちゃんかなかなかできないということです。で、財政の問題がからむのでしょうが、財政の問題については、いま先生がおっしゃったように、国庫助成を求めるということに進んでもらいたい。

たしか原田健先生のお話では、オックスフォードやケンブリッジでも七割、国が出しておるということで、そういうことをもっと押し進める。これは書生論といわれるかもしれないけれども、学生に気がねして値上げをしたくないということでしょうが、私こういうことを考えるんです。新島先生は同志社設立にあたって、アメリカからも基金を入れたけれども、当時の明治の要路の人たちに寄付を求められた。それも懇願するのではなくて、説得して、自分の意図を説明して、堂々と金を集められたという印象を受けるんで

ありますが、なかなかいまはそういうことはできないでしょうが、受益者といってもいいでしょう、その学生から寄付をもらうのではなく、受益者から相当な授業料を取るということは、決して遠慮はいらないと私は考えるのですが……。

司会 国家の助成問題が出ましたので、吉田法晴さん、ひとつ何かそういう問題で、学校の問題とからみ合わせてご意見を聞かしていただきたいと思います。

吉田 県下でも、私立学校の公費補助という問題に取り組んできたんですけど、あんまりそういうこまかい問題をこで言うべきかどうか。創立百周年を迎えて、いわば建学の精神に返るといふか、あるいは新島先生の創立の精神に返るべきじゃないかという議論がされておるところですから、同志社精神、建学の精神に返れというにいたる自分の経験をちょっと申し上げて、そのあとのお話の基礎にしたいと思います。

私は高等学校まで官立をずっと経てきました。中学校、高等学校と。大学も九大に二年だけおったわけですけども、最後の三年の同志社が一番私の学生生活を通じて印象が深

いといいますか、学ぶところが多かったと思います。一つは京都という環境がよかったこと、それから、京大事件の直後ですし、田畑先生などを通じて、佐々木惣一先生や関西のいわゆる京都学派といわれます、そういう先生たちに教えを受けることができた。いわば京都学派の末席を汚すような育ち方をし得たというのは、たいへん私はありがたかったと思っています。

建学の精神にたち返って

それから、新島先生は私どもの入りましたときには、もういらっしやいませんでしたが、湯浅八郎という当時の総長を通じて、新島精神、同志社のクリスチャリズムというのはこういうものであるという、湯浅先生を通じて、ほんとうの同志社教育を受けたという感じがいたします。それで、湯浅先生の信仰と、それから、先生の学問、それから、同志社で育てられたという、まあ、創立当時からお父さんやおじさんと同志社をつくってこられましたから、いわば湯浅八郎という先生に同志社の精神が凝集したという感じが、いた

しました。その同志社精神を湯浅先生や諸先生を通じて学びましたが、その同志社建学の精神が、百周年を迎えて復活が望まれるわけです。私はこういう意味で同志社の中心である総長の、何といえますか、信仰なり、あるいは信念なり、あるいは使命感といったものが大きければ大きいほど、同志社のリバイバルというのは大きいと考えますだけに、ぜひ同志社人の討議も広め、あるいは集中をしていただかなければなりません、百周年を機会に同志社の教育を再興するだけの、人をうる必要がありますという感じがいたします。そして私は、同志社以前にもいろいろな学校で育ってまいりましたし、それからまた、同志社を卒業して、いろんな経験をしてきました。同志社、最近、教育の点については古沢先生からのお話でしたが、少し平和になれたというか、ちんまりなり過ぎてるんじゃないか、という感じが私にはいたします。教育がほんとうになされているかどうかあるいは同志社精神が生きているかどうか、あるいは先生なり何なりを通じて教育がなされているかどうかという問題もござります。これは現象的といえますか、結論的な結果で

すけれども、同志社の卒業生は悪いことはせん、と言われます。しかし、それじゃ、新島先生がいわれた「良心の充満する丈夫」として育っているかどうか、あるいはキリスト教の徳化、文学・政治の交流、学芸の進歩に役立ち得るほどの人になっているかどうか。

「精神的活力があり、真正の自由を愛し、邦家に尽くすべき人物を養成する」ような教育がなされておるか、あるいは人物が育っているかどうかということになると、やっぱりもう一ぺん検討する必要があるんじゃないだろうか。そのことを大いに討議をしながら、そして、同志社建学の精神に返るについては、新島先生まで返るということも必要です、同志社主義という点からいえば、やっぱりキリストまで返る必要があるんじゃないだろうか、そういう感じがいたします。

一九七一年アメリカの大統領が中国に行くということがきまった段階でもございますが世界も大きく変わりつつある。日本も大きく変わりつつある。同志社が百年を迎えて何をなすべきかというのは、そういう建学の精神あるいは新島先生の精神、さらに、救世主といわれましてキリストまで返って、同志社教

育がどうあるべきかということを検討し、討議をしながら、集中をすることから始めるべきではなからうかという、自分が同志社で学びましたものから、そういうぐあいに感ずる次第です。

司会 たいへんいいお話を伺ったわけですが、今おっしゃるように、も一度同志社がキリスト教主義といえますか、新島先生の原点に返るといふ、そういうことがやっぱり同志社でもいわれております。また、いま吉田先輩からそういうご意見を伺っておりますので、学校側もそういう点につきましては、今後姿勢を改めて、真剣に取り組みたいというふうに思っております。

さらにそれでは、熊谷先生にもひとつお話を願って、そういう教育の問題についてもう少し掘り下げたご意見を伺えたら……。

同志社の発展とは……

熊谷 掘り下げた意見といわれると、その反対じゃないかと思えますけれども。これは同志社に関する限りでなく、私のつとめております福岡女学院に関しても、かねがね同じ



久永 碧氏



岡部 治子氏

ような考えを持っておったことですが……。発展するとよくいいますね。同志社は発展したとか、あるいは福岡女学院は発展したとか発展させたいとか、そういうことをよくいいます。けれども、発展することとはほんとうは何であるか。福岡女学院に關しての例を一つあげますと、私戦後復員してまいりまして、足を痛めておりまして、働けるようになって一年目に得たのがいまの福岡女学院のポストでございました。それ以来二十四年ばかりありますが、当時から福岡女学院は、一つは、ことは悪いですけれども、キリスト教主義という看板をあげた学校でもあるし、占領下にあつてやっぱりそういうことが大いにプラスして、いわゆる発展した学校の一つだと思いますが、当時の私どもの学校では「発展する」というような意味と、「大きくなる」というような意味のことを、一緒に考えていらっしゃるような場合があつたと私は思っています。「大きくなる」ことが「発展する」ことであるならば、同志社がマスプロをおやりになるのは賛成と思います。しかし、私はいま先輩も新島先生に返れというようなことをいわれましたが、学生数が二万おるといふこと

が、同志社が発展したとは決して思わない。むしろ、ほんとうに良心を手腕にという気持ちならば、同志社でなければできないというような教育を施され——これはまあ、理想論かもしれないけれども、そういう学校であつたならば、むしろ、ほんとうの意味の発展があるんじゃないだろうか。学生数の多いこと即発展とはいえないと私は思います。キリスト教關係の研修会とか修養会とかに出ますと、同志社を知っていらっしゃる方々の意見の中に、そういうところで取り扱うテーマはたいいてい、キリスト教教育の求める人間像というようなことがテーマでしゃべられるときに、いろんな話から、同志社はキリスト教主義の看板をおるせというようなことを、同志社出じゃない方がおっしゃるわけですね。私だまって聞いていて、どういう意味でそういうことをいつてるのかわかんでもありませんけれども、そういうことを聞くのはほんとうに残念な気がします。ほんとうにキリスト教主義に基づいた学校であるかどうかということ、他からいわれるのではなく、やっぱり学校を運営なさっていらっしゃる方は特に考へてほしいと思います。前向きもいいですが

ときにはうしろを向いて、ほんとうの発展とあるいは存在の価値ということを考えてほしい。

司会 それでは、今度は同窓会の方に、同志社でお受けになった女子教育とか、あるいは同志社の学生生活についての印象というものを、久永支部長さんからお願ひできたらと思います。

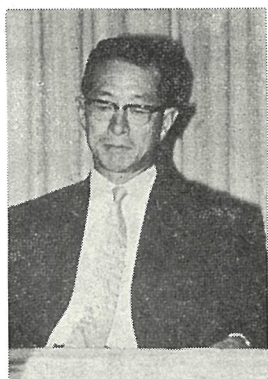
久永 同志社はキリスト教主義の教育を施している学校だと、普通一般にいわれていますけれど、卒業された方でキリスト教の教育を受けてきたんだという自覚をもった方は少ないと思います。私の場合は自分がキリスト教の洗礼を受けておりましたので、学校もそういう意味でキリスト教により多くふれるために、もう一つ音楽の面からでも同志社を選びましたので、すなおに先生方がおっしゃることとか、そういう教育方針とか、いろんなものを全部そのままのみに受け取ってきたわけなんです。だけど、私なんかと一緒に勉強してました人たちは、それに対して、その時代から反抗しておりました。いまそれ考え合わせますと卒業してこられた方で、はたしてこの人は同志社の教育を受けたのだろうか

と思われる方が、若い方の中にも多いと思います。その人たちを教育する先生で同志社出身の方が少ないということも問題があるんじゃないかと思います。キリスト教主義の教育を徹底的にしようという、そこに無理がおこってくるのではないかと思います。現在アッセンブリー・アワーとかチャペルアワーなんかには学生が集まらないということをよくお聞きしてまずし、私なんかの場合は、教会と、学生生活というものは切り離せなかったわけです。だけど、いまはもうばらばらに離れた学生生活をみな送ってますね。だから、その点キリスト教主義の教育をするにも根本的に先ほど先輩がおっしゃいましたけど、いわゆる新島先生の考えのもとに戻れといわれる、その点をもう一度考え合わせていただかないといけないのじゃないかと思います。

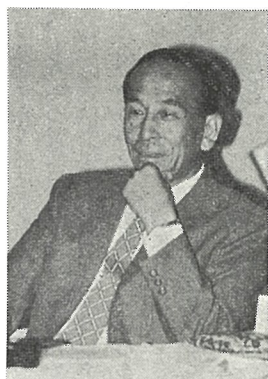
学校当局も、先生方もこの時間はいいんだぞというても、生徒はそれにはついていかないと思います。だから、そこに何かの解決する道を見つけていただかないと、いわゆるキリスト教主義教育というのは行き詰まってしまうのではないか。私なんかのころにはそういうキリスト教的な、いわゆる線香くさ

いといわれた、悪い意味もいい意味もあったと思います。それがいまの学校には全然ないんじゃないかと思います。その点学校のほうで考えていただけたらと思います。

司会 熊谷先生から、あるいは久永支部長さんからご批判がありましたように、一つの問題は、大学だけで約二万人、同志社全部、幼稚園から大学院まで入れますと、大体二万八千人ぐらいになるわけなんです。そうすると、いまおっしゃったように、大きくなることが必ずしも発展でもないし、また大きなことがよいことではない、そういうご意見は私たちももっともだと思んですが、同時に、マスプロという意味は、学生がたくさんおるからマスプロということじゃなくして、学生がたくさんおりまして、それに対応するだけの先生がおり、また、学生がたくさんおりまして、小さいゼミがたくさん持たれ、先生と学生諸君とが十分に接触して、先生の感化を受けるといいますか、先生の教育を十分に身につけるといいう、そういう教育が施されておれば、必ずしもたくさん学生がおるから悪いという形にはならないと思います。マスプロ教育をやる就非常が悪いという



福田 利彦氏



熊谷 勲氏

のは、そのマスプロの弊害ばかりが出て、マスプロの弊害をなくするような具体的な施策を例えば小さいゼミをたくさん持つとか、ゼミナーハウスを持って、先生と学生とが泊まりがけでいろいろ議論をするとか、そういうパーソナルタッチが十分できるような施設を十分完備するということが大切じゃないか。そういう意味でチャペル・アワーとかアッセンブリー・アワーとか、できるだけキリスト教主義の教育が徹底するようなきめの細かい方法は、いろいろ考えておるわけですけども……。もう一つは、学生がこのごろは多様化しまして、一つにまとめるということが非常にむずかしいという問題があります。そこら辺のことをどういうふうに工夫をして弊害をなくして行き、ほんとうに以前のような同志社の教育が、学生諸君の心の底に一人一人響くような、そういう教育をするにはどうしたらいいかということは総長をはじめ、各学校長さん方々に日夜検討し、考えてもらっているところであります……。

心の触れ合いを

久永 もう一言よろしいですか。私どもなんかのころは、心の触れ合いがありましたですね。でも、いまの場合は心の探り合いで、これは職場でも同じことですけれどね。そういう探り合いをするという傾向が多くて、学生運動にそういうふうのなんか結びつくわけで、すなおさがなくなっているんじゃないかと思いますですね。その点教育方針なんかに入れていただいて……。

司会 それと、こういうことはいかがでしょう。私はいつも思うんですが、戦後の日本の大学生が、戦前の中学生の数と同じぐらいなんですよ、だから、もしここにいらっしゃる先輩の方が、同志社に行っていらいしやる時代だったら、九州から来ていらいしやるということは、ある意味ではエリートであったと思うんです。だれもが来ておる時代ではなかったと思うんですね。

現在は以前の中学校の学生数と大学の学生数が匹敵するぐらい多いのですから、つまり大学の門戸が開かれて、非常に多数の大学生が来ておるといって、そこら辺のところが、前の大学といまの大学との質的な差異があるような感じがしておるわけなんです。そういう

点は久永先生いかがでしょうか。

久永 それはもう十分に思っております。

司会 したがって、大学生の質とか、考え方、生活の仕方等は、戦前とは非常に変わってきて、学問するということが一般大衆化したようなところがありますね。

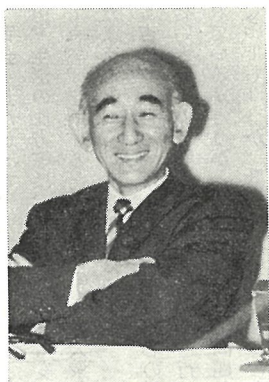
吉田 教育ですからね、やっぱり心の触れ合いというか、教育者の教育が実際に行なわれているかどうかというのが、一番問題じゃないでしょうか。数が多くても、私どもの京大の教室に行きましたら、千人ぐらいい入る一番教室で、やっぱり民法総論の講義がありました。私どものクラスは五十人ぐらいで、その上、そこが同志社のいいところだと思うんだけど、総長の家であろうと、先生の家であろうと、みんな開放してもらって、教育を受けることができました。実際に一人一人が。ですから、触れようと思えば同志社精神に触れることができた。ところが今は一人一人の魂に触れる教育をしようとしているのかどうか、あるいはゼミナル云々という話がありましたけれども、客観的にはやっぱりそこに疑問があるのじゃないですか。努力はしている、討論はしている、というお話です。

けれども、その辺を、それじゃどこから鍵を求めていこうかというのがみんなの議論でしようから……。

細分化と教育

福田 いまの学生というのは、大学に行く一つの目標としましては、やはり卒業後の安定ということが、やっぱりある程度大きな要素になっておるんじゃないかと思うわけですね。それで、さっきもマスプロということばが出ましたけれども、これは多分にマスプロ化しておると同時に、反面また、細分化もしておるわけですね。これは最近の若者の考えにしましても、一人はこう考えておるかと思うと、隣の者は全然違ったことを考えるというようにどんどん細分化していっとなると思うわけです。だから、問題は、そういう思想的なものを、同志社の掲げておるキリスト教主義教育にどういうように統一していくか。統一するまでもなく、少しでも色づけしなくてはいけないんじゃないかということが、現在問題になっておるわけですが、私はキリスト教主義教育を、こういう細分化されて





大江 直吉氏



上田 洸氏

おる学生に、全部が全部色づけするというのは疑問だろうと思うわけです。というのは、われわれも学生時代の記憶としましては、キリスト教主義的教育を受けるために入ったんでもないけれども、そのつど教育を受けた、新島先生が持っておられるキリスト教主義教育というのは、まあ、抽象的な意味の共感をしただけであって……。私はキリスト教主義教育というのを、こういった細分化されたみんなの者に強要することは無理であって、あくまでもこういう細分化された人たちに、何らかの方法で、やはり教育しなくてはいい。ということはどういうことかといいますと、心の触れ合いとかいろいろの方法はあるだろうと思いますが、これは教育者の先生方がやるべきことであるとともに、特に百周年というような大きな一つの目標といいますか、大きなステップを目の前にした時点においては、これを指導しておる経営人といいますが、執行部の方からそういうのに取っ組んでいくというような気持ちがないことにはついていく学生たちというのは、それぞれ、おれはこっちに行くんだ、おまえはこっちに行くというようになっていくんじゃない

いかと思うわけです。だから、やはりやるについては、教育者の問題もありましょうけれども、執行部の問題もある。

司会 いまおっしゃいましたように、学校当局あるいは教授を含めて学校側が、教育の問題について真剣に取り組むべき責任があると思いますし、また、そういう形で一致結束して、教育の任に当たるべきだというふうに思っております。最近ご卒業になりました上田さん、学校を振り返ってみてのお考えなどひとつお聞かせ願ったらと思います。

上田 今日は父が出席するはずなのに突然都合で出られなくなりましたのでお詫びがた、お手伝いのつもりで出て参りました。私が入ったのがちょうど十年前で、約六年間学校におりましたので、最近の同志社についてちょっと説明させていただきますと、入学しましてすぐに、一週間から十日間ほど新島先生の墓参りとか、新島精神その他説明があるわけなんです。そして、入学したあとにプロゼミと申しまして、一年生は全部、ある先生の担当のもとで、同志社の授業を全部一応リーダーしていただくわけです。そのあとに教養課程を終わりました、専門になりました場

合に、各先生につきましてあるテーマを勉強するわけですけど、そのゼミの場合にも、やっぱりある程度の新島精神、それから、キリスト教精神といえますか、同志社カラーというのをやっぱり受け継ぐと思うんです。キリスト教精神、または、新島精神とおっしゃいますけれども、それはおのずから、学生生活を終わるまでに、何らかのものを受け継いでいるんじゃないかと思うんです。商学部・経済学部に関しては、父兄会というのがありまして、これは吉田先生もご存じだと思っただけですけれども、各家庭に成績表を直接送りまして、先生と家族の者が直接話し合っていて、在学中の成績を知らせるとか、そういう細かい点までも学校では世話をしているのは、ほかの大学ではないと思うんです。また、卒業してからの横の連絡というのは、商学部の場合は樹徳会、経済学部の場合はまた別にいろいろな集まりが、同志社の場合には特に多いと思います。ですから、それほど心配にやらなくてもいいんじゃないかと思うんですけれども（笑）

古沢 意外ないいお話を聞きましたが、現在もそうでございますか。

上田 三年前がそうです。

古沢 そうだったらいいですね。

吉田 私が上田さんのお父さんから引き継いで、商学部の後援会の支部長を引き受けた。実際はほとんど上田さん親子あるいは会社をあげて社長さんから、奥さんまでも含めて、世話してくださったんですけどね。成績表を郵送しないで持って来て、そして、父兄を呼んで渡ししながら、個々の連絡指導をしてもらっております。必ずしも全部ではありませんけれども、少なくとも全九州の六〇％ぐらいは集まりますね、毎年。

熊谷 修猷館からテニスやったりした兄弟が同志社に行った。ちょっといま名前を思い出しますが、その母親がこの間も私のワイフと会って、むすこ自慢ですね。むすこもいが、同志社にやったことがよかったと。その一つのあれが上田君がおっしゃったような大学で保護者会みたいなことをしていた大学はよそにはないそうで、これはやっぱり誇りにできることだと思います。そういう意味ではマスプロはマスプロでいいと思いますけど……。そういうこまかい手を打ってあるということとは、やっぱりわが母校だと思います

すね。

古沢 商学部だけじゃないんですか。

上田 経済もやっているといます。

熊谷 まあ、お互いに同志社につながっているのですからね、母校のことを誇りに思うのはあたりまえと思うのですが、現在の在学生、いわゆる現役の学生連中は、同志社ということを誇りに思っているんじゃないかな。

上田 私はそう思います。入学してすぐのときに、君たちはここに入ってこられたけれども、ここに入る意思がなくて入ったんじゃないかということはいわれたわけですね。私は父が行ってたせいもありますし、同志社のことは詳しく知ってましたものですが、誇りを持って入ったつもりですけれども担当の先生方が、君たちはほかの京大、東大を受けて、すべてこちらに回ったんじゃないか、だけれども、ここはいい学校だということはいわれたんですよ。せっかく入ってきた者には、やっぱりこの学校は最初からいい学校だということをいっていただきたいですね。私はそれを感じました。

岡部 私が学生時代のことでございますけれども、学生課に参りましたら、ある学生さ

んに、おまえはどこをすべってきたかっておっしゃったんですが、そのとき私もそのものいい方にびっくりしてしまいました。最近同窓生のお若い方が十人集まられる機会がございまして、そのときに、お若いと申しまして昭和三十年前後の卒業生でございます。同志社を卒業してよかったと思いますかと聞きますと、異口同音にほんとうによかったとおっしゃいます。それじゃ、どこがよかったんですかと聞きますと、やはりキリスト教というものを教えていただいたことで、そしてそれが何かちょっとつまずいたようなときにとても力になるとおっしゃるんでございます。あとから今度は大正の末期から昭和の初めにかけてご卒業になりました六人の方にお話を伺いました。そのときも、当時はたいへんきびしくて、デントン先生なんかから、礼拝に出なければ追いかけるような状態ではないやながらでも礼拝には出てました。そのことがたいへんいまになって役に立っております。特に毎日の礼拝のときに、いろいろ珍しいお客さま、たとえば武者小路先生だとか、いろいろな先生方のお話がございまして、そんなお話もたいへんよかったと思います。

やはり、そのときはほんとうにやだったと思つた礼拝が、いまは一番よかったと思つておりますというお話でございます。

それから、錦織落葉さんとおっしゃいます大正十年から十三年までの間に在学なさつていた方のお話でございますが木村清松先生の伝道集会があつたそうでございます。そのときにご本人はたいへん感激なさいます。そして、洗礼を受けようかなあと思われたそうでございます。そうしたら「お姉ちゃん、木村先生のお話を聞いて、あんなので洗礼を受けるなんてたいへんな間違いだ」と、同志社中学の弟さんはそんなふうに反抗なさいます。その話を聞いて、洗礼を受けずに卒業なさつたそうですが、その弟さんたちがたいへんやんちゃな学年で、カンニングをして退学させられた生徒さんがいたそうです。その方たちのためにチャペルの礼拝のときに、退学にならないようにとみんなですわり込んでお祈りをなさつたりで、何しろ学校ではたいへん悩まされた学年だったそうでございます。その方々がご卒業になり、円山公園あたりをみんなて卒業のお別れにお歩きになりましたときに、それじゃこれでみんなちりぢりばら

ばらになるから、お別れに歌をうたおうということになり、何の歌だったかといひますと結局それは「神ともにいまして」だったそうでございます。それで、その方がおっしゃいますには、どんなに反抗しても、どんなにむちゃくちゃをしても、同志社で学んだ者は、やはり一番大事なものをちゃんといただいで卒業しているんだということを、話してくださいました。私もたいへんいいお話を聞いたと思ひました。

ちよつと話がそれましたけれども……。

司会 同志社の教育の問題につきまして、ご出席の方々から非常に感銘の深いお話を伺ひまして、同志社の教育のりっぱさを私たちもしみじみと感じさせられたわけでございまして。

同志社の教育の問題については、もっといろいろ伺いたいんでございますけれども、今度は話題を少し変えまして、四年後には百年を迎えますので、新しい同志社として百年を迎えるにはどうしたらいいかとか、あるいはまた、学校当局がこういう姿勢とか、こういうふうな夢を持つて新しい同志社を創造すべきであるとかいうふうな、ご意見をお聞かせ

願えたら非常に幸いだと思っております。

高木 支部長さんから何かご意見ございまして、お聞かせを願いたいと思います。

マスプロでない教育

高木 教育の云々ということになりますとちょっと畑違いになりますが、先ほだらいお話があります様に、マスプロといったら語弊があるかもしれませんが、そういった感じでない、もう少し区切りのついた教育のあり方があっていいんじゃないか。そういった意味で、学部をふやして学生をふやすとかいうふうなことで、いまあるもの、そのものをはつきりともう少し色彩を強くして、設備を充実させたものにして、そして、ほんとうに勉強のできる場をつくっていただけたらなと思います。

司会 おっしゃるとおりで、いまの大学は約二万人ほどおりまして、今出川のキャンパスがそういう意味では総体的に狭いんですね。ですから、どこかもっと新しい場所を考えにやいけないのではないかと、そういう問題も出ているわけです。

高木 まことに認識不足なんですけれども

このごろ同志社タイムスやら時報を拝見しますが、田辺というのはどこにあるのですか。

司会 ちょうど京都と奈良の間にございます。京都駅から三十分、奈良からも三十分のところで、約三十万坪ぐらいの土地があります。それを、新しい同志社の校地として、何か活用するようなことをいま考えているわけです。田辺をどういうふうな形で学園として充実していくかというようなことも百周年の目標の一つじゃないかというふうな議論も出されておるわけなんです。

熊谷 そこに校地があるわけですか。

司会 校地として三十万坪ほど買ったわけですが。それは丘陵でございまして、平地じゃございませんけれども、造成をすれば非常に起伏に富んだ景色のいい校地になろうかと思えます。古沢先生、ひとつ百周年に向かってのいろんな問題をお聞かせを願いましたら……

外形の発展と中実の充実

古沢 私どもが在学中は、例の堀貞一先生

という、新島先生の直弟子の方がいらっしやいまして、非常な影響を受けました。何かと批判する学生もいましたけれど。私はいまから考えますと、ほんとうによく新島精神をたたき込んでくださったと感謝しております。一宗一派の信者をふやすといった次元じゃなくて、ほんとうのキリスト教の精神をこの先生は教えてくださったと思ってますね。パウロの信仰といいますが、平穩無事なクリスチャン生活じゃなくて、どんな迫害にもめげなかったパウロの信仰を、よくわれわれに説かれました。

私の在学中に同志社創立六十周年記念があったんですが、そのころ堀先生が、百年のときにはわしはもうこの世におらん、しかし、君は百周年を迎えられるんだということを、おっしゃったんですが、いま百年ということを知って感慨を覚ゆるわけでございます。この百周年に臨むについては、もうこれ以上の発展、外形的に発展することは望みません。

誰しも気がつくことは、あの今出川キャンパスが非常に狭過ぎますね。よくあれで文部省が認めておると思えます。ところで、田辺には三十万坪の校地があるということですか

ら早く分散されることをお願いしたいと思ひます。

熊谷 古沢先生のおっしゃったように、あまり大きくならんでいいと。結論はそんなですが、それに、やっぱり同志社に学んだ者が、どこでも誇れるような母校であつてほしい。抽象的にいえばそうなんです。ちょっと余談になりますが、私は昭和十一年ごろに、学部だけ四年お世話になった者ですが、初めから同志社を目ざして行つたわけじゃないんです。後で、福岡県人会というのをつくりまして、「ちくし路」という機関紙を出しまして、創刊号にそのことを書いたんです。「望むと望まざるとにかかわらずわれわれは同志社の門をくぐつた」というようなことを書き出したのを、覚えてますが、初めから望んで行つた大学じゃなかったんですけれども、私は入つたとたんに、母校愛は急にできました。当時私の知つてゐる限りでは、福岡地区ではそう同志社は知られていなかったと思ふんです。

これじゃないかと思うて、二、三人仲のいいのがおりましたので、町で遊ぶとき、岩田屋デパートとか玉屋デパートさんに行つて呼

び出しの放送をやつたものです。「京都の同志社大学の斉藤さん、だれだれさんお待ちでございます」。なに本人はここにおるんです。(笑) そういうふうなことをした。まあこれはほんとうに幼稚な母校愛じゃありますけれども、同志社をPRしたい氣持だったのです。

学生数が多くなれば、それに正比例して教授陣営も大きくなるとおっしゃいますけれども、やっぱりこじんまりしたほうが、われわれには何かアカデミックな感じがするんじゃないかと、そういう氣がいたしますので、必ずしも大きくすることを願わないというのはそういう意味でございます。

司会 それでは、久永さんに、百周年を迎える同志社が、どういうふうな理想を持ったらしいかとか、どういうふうな方策を持ったらしいかというふうな、そうした意見をひとつお聞かせを願つたらと思ひますが……。

久永 ちょっとお尋ねしますが、いままで同志社はどうして小学校ができなかったのですか。

司会 小学校さえできれば、それこそ大学まで一貫した教育になるからというご意見が

あつて、そういう問題が過去に何回も出たことがございます。しかし、義務教育でもありますもんですから実現をしなかつたというのが現状じゃないかと思ふんです。

久永 一番人格形成で大事な小学校というものが同志社にはないということが、どうしてもそういうことになってきたんだらうかと思つて、疑問を持ちます。

自分たちが同志社の教育を受けてきたので自分の子供にもそういう教育を絶対受けさしたと思ひますし、卒業された方も思つておられると思ふんです。卒業生の方には、まあそういうご意見が出なかつたのは、どうしてかしらと疑問を持つんですけれども、そういう実現方を一応検討していただくことが必要じゃないかと思ひます。

教育者の養成を

それと、女子大に保育料がございませんで、すね。

いわゆる教育上の問題に対しても、保育料というものが、ぜひ同志社としては必要だと思ひます。絶対につくつていただかないとい

けない学科だと思ひます。人間関係というのがだんだん複雑になってきまして、もうすなおな人がいなくなりましたですね。返事ひとつ「はい」といえない人たちが多くなつてきてますので、あらゆる面でそれを教育していく教育者を一人でも多く送り出していただきたいということが、私たちの願ひでございます。

司会 それでは、もう一人同窓会のほうで岡部さん、女子の立場から何かご意見がありましたら……。

社会奉仕の精神を

岡部 まず、同志社がさっきからいわれておりますように、これ以上大きくしないで、ほんとうに充実させていたきたい。そして同志社の大切なものをなくさないようにしていただきたいと思います。

それから、社会奉仕の精神というのがいまの世の中にたいへん欠けております。それを同志社でうんと高揚していただきたいということでございます。

それから、先ほどの古沢先生とはちょっと

意見が反対でございますが、この間からもいろいろ同志社時報なんかに出ておりましたが、やはり同志社らしい医学部ができますならばつくっていただきたい。そして、それに付属病院ができますれば、これは全く夢だと思いますが、やはりそれが建学の精神と申しますか、新島先生もお望みでいらっしゃったそうでございますので……。

司会 それでは、福田さんからもひとこと。先ほどちょっと申し上げましたように、田辺というところで三十万坪ぐらいの土地を買ったわけがありますが、何かそういうところで新しい学校をつくるとか、また、新しい時代に即した教育施設をつくるとか、そういうような問題も、その土地を活用する場合には、考える必要があると思ひます。あるいはまた同志社がさらに躍進するためには、どういふふな理想や目標を立てたらいいかということも、十分考えなくちゃならない問題だといふふうに思っておるわけでございまして、そういう点で何かご意見を……。

福田 やはり、精神面では、この際あらためて新島精神の灯を高らかに掲げるべきだ。ということとは、先ほど吉田さんがいわれたよ

うに、新島精神の原点に返り、それから出発しようじゃないかということが、一番大切なことじゃないかと思うわけでございます。

それと、教育の規模とかそういったことでございますけれども、やはり思想関係にしても細分化するとともに、それに応じた教育というののおのずから細分化していくのではないかと思うわけでございますけれども、こと先生たちにしても、教育というのは、教育に至るまでの過程としては合理化する面があるかも知れないけれども、実際直接教育として携わる先生方とか、あるいは施設関係というものの合理化というのは、なかなかできにくい面があるのではないかと思うわけです。だから、そういうように細分化しましても、結局問題は財政面とのかね合い、健全財政をたてまえにやっていかなくてはいけないことでございますから、いまでも健全財政とは思ひますけれども、やはり今後百年の計を立てるについては、やはり健全財政から伴うそういう細分化の方向を研究していただくということをやりたいと思ひます。やはり両方の車が回ってこそ教育ではないかと思ひますので……。

司会 それでは、上田さん、あなたは比較的新しい卒業生だし、若いんだから、新鮮な感覚で見た同志社の、夢を話していただきたいと思います。

上田 私はいまのままでいいと思うんですけども、医学部その他ができて発展するなり、大きくなっていいと思いますけど、各担当者と申しますかね、できるだけ同志社の精神を持った方々の指導者を、できるだけ多く集めていただきまして、各学部のため役が、はっきりした同志社カラーを持った方に指導していただくようになれば……。大きく発展しようが、このままの状態であろうが、私はいいと思うんですけども、その人選といえますかね、その辺をできるだけ下部からずっとそろえていただきたいと思います。

司会 どうもありがとうございます。新しい同志社はもう少し大きなビジョンを持っているわけですね。何かそういうビジョン的なもの、あるいはまた、進むべき新しい時代が世界が変わってきていると思うんですが、そういうときに、いままでの同志社、あるいは私学としての同志社も新しく、大きく脱皮し

て、世界的な視野に立った学校、同志社人にならなくちゃならないし、同時に同志社も世界の中の同志社というような問題を考えなくちゃならない、そういう時期に来ているように思います。そういうふうな立場から、吉田さん、何か百周年を迎える同志社に対しての苦言でもけっこうですし、夢でもけっこうです、ビジョンがあれば……。

吉田 座談会あるいはアンケートの回答で出されたものを拝見しておって、考えてみると、私どもは卒業した校友なり、同窓ですから、私どもまで意見を聞いてもらうのはたいへんありがたいと思いますが、しかしまあ一人の知恵がよくするところではありませんし、それから、学校の中は学校の中で、あるいは先生たちは先生たちで、やっぱり自己批判の上に意見を述べておられますが、ただ、先生たちが大学だけでなしに、もっと高くならなきゃならんと。大学もあることですから日本の最高の水準にいつているかどうかということについての反省がありがたいようでございます。

それからもう一つ、新島先生のことばにあるとおり、学生を大事にする同志社のことで

すから、学生を含んでこの問題を討議していただきたい。そういう意味で、田中伊佐久先生、学校当局、教授団、学生たちはみずから問うて検討すべきだというお話もあります。百周年を迎えるにあたって関係者がみんな参加し、その討論を組織していただくことが必要でなし継続的に、正式な機関をつくって、集約をしていただくということが必要ではなからうか。それが一つです。

国際交流の中での 同志社の役割

それから、卒業生が、日本だけでなく、朝鮮にも、あるいは香港にも、中国にも、これはアジアの全域にもまたがっておるかもしれませんですけど、それはやっぱり、世界的な国際交流の中の同志社の経歴もございしますが、少なくともアジアにおける役割りというものは、中身も外に向かつての関連性もやっぱり考えなきゃならんのではなからうか。そのことは、学園、学校全部の中身と、その対外的な働きといえますか、さっき社会奉仕云々ということをいわれましたけれども

やっぱり同志社自身が、同志社全体がそのことが必要なのではなからうか。私ども社会福祉関係といえますか、そういう面で、たとえば設備は公の援助を得てりつぱなものをつくるのがいいけれども、しかし、その中身はそのクリスチャリズムなり、あるいは社会奉仕の精神というものがなければ、ほんとうに生かされんということを、いろんな面で見えてまいりました。田辺に移転の話も出ましたけれども、その中で同志社らしい、今後の新しい学園づくりをやっていたきたいし、それからその中身と同時に、その社会に対する活動の部面は、たとえばセツルメントを見ましても皆さんの意見の中にそういうものがございますが、これらは同志社らしい、やっぱり今後の中身の充実、あるいは社会的な役に立ち方という点もあるかと思えます。それらの点をひとつ検討をいただきたい。

ただし、いわゆるいまいわれている産学協同というのは、私はかつての同志社の神棚事件というようなものを起こしかねない方向だと思えますから、これは絶対に私はとっていただきたくないと思います。しかし、学校の社会的な役割り、あるいは世界的なといいま

すか、あるいはアジア的な留学生を受ける、あるいは学校を輸出するという話もありますけれども、つながり等は、これは将来の同志社の姿としても考えなきゃならんことだと思います。学校の中と、それから、社会との交流、奉仕というもののひとつお考えをいただきたい。

司会 どうも長時間ありがとうございます。ご出席の皆さんから、一人一人多様な意見をいただきました。百周年を迎える同志社にとりましては、非常に参考になるご意見ばかりだと思って感謝をしております。ご意見をよく整理いたしました。百周年を迎えるにあたり参考にさせていただきますと思っております。本日はたいへんお忙しいところをお送り合わせをいただきまして、どうもありがとうございました。



(18頁より続く)

に危害を及ぼす危険性が認識されうるだけで足りる。」(原告準備書面) その認識の努力をどう行なったのか。丁度、元チッソ付属病院長細川一博士が、当時「原因物質がなんであるかをつきとめるのは後まわしにしよう。廃液の中に、その原因物質があるとすると、廃液そのものを猫に食べさせてみたらどうだろうか。まず会社側の黒白をつけ」(『文芸春秋』43年12月号手記)として猫実験を始め、34年10月6日遂に四〇〇号の発症をみるに至ったように。(そして、企業内では必然的に実験継続不能となったが。勿論、これ以後のチッソは故意で裁かれるべきである、と原告はいう。)

そしてこれは、同じく過失責任論を掲げてくる森永ヒ素ミルク、サリドマイド、カネミオイル等々の資本の偽瞞を撃ち、資本の下の方の科学者の質を問うことになる。従ってこれは、大きな声になりつつある無過失責任論の方向を必ずしも取らない。

(高等学校教諭・国語)